

紙すき体験のご案内 要予約

体験ご希望の方は、メール、またはお電話で事前にご予約ください。当日受付はお電話にてお問い合わせください。

体験受付時間 11:00-16:00 体験所要時間 1時間～1時間30分

- ・5～6歳からお一人で体験いただけます。
- ・小さなお子様は保護者の方と一緒に体験が可能です。
- ・紙をすいた後、その場で乾燥してお渡し、または乾燥後に郵送いたします。(送料別)
- ・一度に体験できる人数は約50名です。それ以上の団体さまはご相談ください。

ご予約 0269-82-4151
お問合せ tesuki@kamisukiya.com

体験料	紙すき体験	
	・ハガキ(3枚)・名刺(5枚)	各¥1,000 (¥900)
	・A4判(1枚)・色紙判(1枚)	
	※上記のうちいづれか一種。	
	うちわづくり(1本)	¥1,200 (¥1,100)
	※うちわは乾燥後、翌日以降に郵送します。(送料別)	
	万華鏡づくり	¥1,400
	時計づくり (丸・角・小型いづれか)	
	テーブルライトづくり	各¥2,500

※() かつこ内は20名さま以上の団体料金です。
※ 20名以上の団体さまは1ヶ月以上前にご予約ください。

和紙を深く学びたい方へ 要予約

1セット1～4名さままで体験が可能です。

10日以上前にご予約ください。

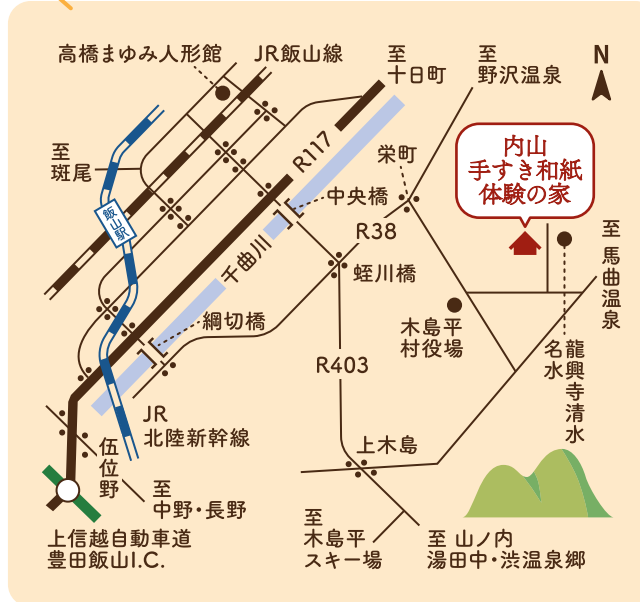
体験時間 13:00-15:30 (2時間30分) ※1日1セット限定
※小学4年生以上対象

体験料	かずはたき体験	1～4名さま(1セット) ¥10,000
	煮たコウソの皮を、御影石の台の上で、木槌でいねいに叩いてほぐし、とがして紙すきをします。紙すきはハガキ・A4判・A3判などお好みのサイズで、原料がなくなるまで複数枚すいていただけます。ハガキで約20枚分の原料をご用意します。	
体験料	大判流しすき体験	1～4名さま(1セット) ¥12,000
	職人が使う桁と竹の簀を使い、伝統技法である流しすきの方法を学びます。初めての方には難しいですが、時間内に何度も練習し、2～4枚の完成を目指します。サイズは60センチ×45センチで、できた紙は水を絞り、板に張って天日乾燥し、後日郵送します。(送料別)	

ご予約については、繁忙期にお受けできない場合がございます。ご了承ください。その他卒業証書づくりなど、ご希望に応じ企画いたします。学校の体験学習や研修旅行などもご相談ください。

※料金はすべて税込料金です。

交通アクセス



- ご来館にはお車、タクシーをご利用ください。
●最寄りI.C. 上信越自動車道 豊田飯山I.C. より約20分
●最寄り駅 JR北陸新幹線飯山駅より車で約15分

周辺の見どころ

- 馬曲温泉 ●カヤの平高原 ●木島平スキー場 ●ハス寺 稲泉寺
●菜の花公園 ●阿弥陀堂の里 ●野沢温泉 ●湯田中・渋温泉 ...



内山手すき和紙体験の家では、体験の他にもさまざまな和紙製品を制作・販売しています。

最新情報、
開館日は
こちら！



光と雪のつくる紙



紙漉屋

内山手すき和紙 体験の家

手すき体験・手すき紙制作・販売



入館料
無料

Tel / Fax 0269-82-4151
Mail tesuki@kamisukiya.com
URL http://kamisukiya.com

〒389-2301 長野県下高井郡木島平村大字穂高1143-3

営業時間 11:00-17:00 休館日 水曜日・年末年始・月2回(不定休)

内山紙のできるまで



(秋)

こうぞ 漢字で「楮」
クワ科の植物。
春から秋までに3m
以上成長する。



芽かき
6~8月、こうぞの幹
が太くなるように
わき芽を摘む。



収穫 11月下旬、
葉が全部落ちてから
収穫します。



かずはぎ

束ねた楮を釜で蒸し、熱いうちに皮を
むきます。一年分を2~3日のうちにむい
てしまいます。



凍皮しかわり

1月頃の寒の時期に、皮を水に浸してから、一晩
外に出して凍らせる。すると表面の黒皮が浮い
てくるので、その黒皮を「おかき」という道具
でこそげ取ります。



雪さらし

きれいにした皮を1~2月の深く積もった雪の上に並べます。
昆布のような色をした皮が、5~6日で白くなります。



煮熟 しゃじやく

皮をアルカリ性の薬品
で4時間ほど煮ます。



ふしひろい

残った楮の黒皮や
チリを清水の中で
取りのぞきます。



かずはたき

やわらかくなった
皮を、石の台の
上で「ぶつちで」
たたいてほぐす。



紙すき

濡き紙にほぐした繊維と
ネリ(トウモロコシの根からとった
粘液)を入れ、一枚一枚漉いては紙床に
積み重ねてゆきます。
厚さがそろそろよいねいに漉きます。

手すき和紙の故郷、内山

眼下には千曲の流れ、正面に斑尾、妙高など奥信濃の山々を望む小さな集落、内山。冬には雪に埋もれるこの地が、江戸時代より北信地方のよい障子紙の代名詞とされてきた内山紙のふるさとです。

夏、大きくのびたこうぞを晩秋に刈り取り、皮をはぎ、冬、深い雪の上にさらし、湧き出る清冽な水で漉きあげる…季節とともにおこなわれてきた昔ながらの手作業が、ぬくもりのある和紙を生み出します。

内山紙の由来

江戸時代の前期、寛文元年(1661)に、内山の萩原喜右衛門が、お伊勢参りの際に美濃で紙すきをおぼえて帰り、製造したのが始まりといわれています。また、内山の奥地、佐部種(さぶたね)に住ん

でいた人々が紙すきをおこなっていたという古い伝説も残っており、この原始的な紙すきをもとに、喜右衛門が美濃の製法を取り入れ、商品生産としての内山紙をつくりだしたとも考えられます。

雪の中で生まれる内山紙

丈夫で透明度の高い紙として知られる内山紙の最大の特徴は、有数の豪雪地である風土を生かし、雪晒(ゆきさらし)と呼ばれる技法で繊維を漂白することにあります。1~2月、積雪が安定し、気温がもっとも低い時期の雪の晴れ間に、こうぞの皮を

雪の上に並べておくと、太陽の紫外線と雪の水分からオゾンが発生し、繊維が驚くほど白くなります。薬品を使わないこの方法から、ふっくらとしなやかで、しかも強靱な和紙が生まれるのです。



圧搾 あさく

積み重ねた紙床を
ジャッキでしぼります。
24時間以上かけて、
徐々にしぼってゆきます。



紙干し かみほし

しぼった糸を一枚づつ
ほかし、板にはりつけて
天日でかわかす。

紙・無断転載 紙・かみほし

当館の和紙はすべて こうぞ100%で製造しています

全国的に和紙の原料は、こうぞ、みつまた、がんびの3つが主に使われていますが、みつまた、がんびは比較的暖かい地方の植物であり、内山紙では従来こうぞを使用しています。こうぞの特徴は、繊維が長く、丈夫な紙

ができることであり、強さと保存性から障子紙や戸籍台帳用紙などに多く使われてきました。現在体験の家ではこうぞを栽培から手掛け、紙すき、加工全般を通して、漉き模様の紙や染め紙など、多様な紙を制作しています。